

# 編集室

\* 今月号では、特集「世界的な競争領域にある最先端デバイス技術」を企画しました。

\* 1980年代の日本のエレクトロニクス業界には、大きな勢いがありました。例えば1990年には世界の半導体売上げベスト10企業の中に日本企業の6社がランクインしていました。当時NHKで放映された「電子立国日本の自叙伝」という番組が今でも強く印象に残っています。私はこの勢いはいつまでも続くと思っていました。

\* ところが、世界の半導体産業のビジネスモデルは変わり始めていました。それに気がついたときには、新たな企業が台頭していました。日本企業も世の中の流れに追いつこうとしたものの、常に後追いとなりました。今では、ベスト10企業の中に僅かに2社がランクインするのみとなりました。

\* 日本は技術力や研究開発力でしっかりした力を持っています。ただ、世の中の状況を把握しつつ、中長期的にどのような戦略を持ってビジネスを行うべきかをうまく考えられなかったように思います。

\* 現在、経済や産業がグローバル化して世の中が大きく変化する中で、しっかりした技術や革新的な技術を持っていれば、今後もエレクトロニクス業界において起死回生のチャンスは大いにあると思います。そのためには、今の日本がどのような技術において優れ、また、優位にあるべきかを知っておく必要があります。

\* 会誌編集委員会でエレクトロニクス分野を担当するWG・Cでは、そのような思いを込めて本特集を企画しました。

(前編集特別幹事 吉川信行)

\* 国際化は、学会活性化の重要項目の一つである。本「編集室」の次のページにある「IEICE Global Plaza」も、会誌におけるその具体的な企画である。2009年2月号から始まって3年半の実績があり、ページ数が多い刊号も増えている。

\* 私は昨年度、英文論文誌C(以下、英文(C))の編集委員長を仰せつかっていた。論文誌も会誌と並ぶ学会の顔である。そこでも一層強く国際化が要請されている。本欄を借りて、英文(C)編集委員会の試行錯誤の一端を御紹介したい。そして読者会員から御意見やアイデアを頂ければありがたい。

\* 英文(C)は広くエレクトロニクスを扱っている。競合誌は、IEEEの各対応分野のTransactionsやJournal、米物理学会の各誌などであり、国内では応用物理学会誌などもある。論文執筆者の中にはそれら他学会の役員や他論文誌の編集委員も少なくない。著者が会心の作と感ずる原稿は、より多い読者を持つIEEE等に投稿されてしまいがちであるようだ。一つの評価指標であるインパクトファクタは、現状で本会各論文誌の中では最高であるが、競合各誌に比べると低い。論文誌の評判と投稿行動とは、鶏と卵の関係ともいえる。そこで英文(C)では各研究専門委員会に特集号を多く企画してもらい、当該分野の研究者自らの意識的なサポートをお願いしている。

\* 編集委員の海外研究者率、特にアジア地区の研究者率を、意識的に高めてもいる。アジア地区は文化的・経済的に多様性が高く、北米や欧州地域に比べて難しい点も多い。しかし、アジア地域の大学の本会論文誌に対する期待が大きいことも事実である。論文の質の確保や処理所要日数の抑制とを両立させながら拡大を図っている。編集委員会をいかに開催するかも課題である。テレビ会議も個別には可能だが、顔を合わせた会議もやはり必要だ。総合大会やソサイエティ大会の併催委員会に海外からもなるべく出席してもらおうことも、取っ掛かりとしてある程度効果があるようである。もっと人数が増えれば、英文(C)内の各分野の分科会といったものを設置して、それぞれの分野の国際会議の折に分野内で集まって意見交換する、といった方法も期待できるかもしれない。

\* 多様なアジアをいかにまとめて世界をリードしてゆくか。多くの日本発の学会が同様の課題に取り組んでいるだろう。アジアの潜在性を考えると、その責務は一層重い。試行錯誤を続けている。

(編集特別幹事 廣瀬 明)